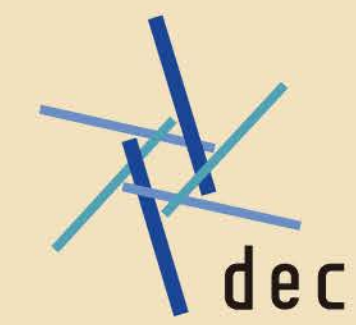


北海道根室市：地元の“いつもの道”と来訪者の“初めての道”をくらべてみた



一般社団法人北海道開発技術センター 佐藤真人(m-satou@decnet.or.jp)、新森紀子



根室市立海星学校 6年生 齊藤柊真、佐々木康佑、辻真梨、法月悠真、山崎ひまり、担任 島谷亮生

1. 背景と目的

【背景】

- 北海道では、生活・物流・観光を支える道路（みち）と野生動物の生息環境が隣接している地域が多く、特に道東地域では、エゾシカのロードキルが地域課題となっている。
- 根室市立海星学校では「総合」の学習時間において、エゾシカとの交通事故問題、ロードキル対策について学ぶこととした。

【目的】

- 本学習では、根室市におけるエゾシカとの交通事故実態を把握し、地域全体での安全意識向上やロードキル対策への貢献を目的とした。

【補足説明】

- 本ポスターは、根室市立海星学校6年生の調査結果をもとに、一般社団法人北海道開発技術センターが取りまとめたものである。

3. 結果

【調査結果】

- 総回答数：1,285件（あり：488、ない：797）
- 事故経験「あり」の割合：38.0%
- 施設別にの事故経験の有無を見ると、「あり」の割合が高い施設と、低い施設があることがわかった。

事故経験の有無と「あり」の割合

調査箇所	事故経験		
	あり	なし	「あり」割合
①根室市役所	175	160	52.2%
②根室市総合文化会館	152	142	51.7%
③道の駅スワン44ねむろ	119	308	27.9%
④春国岱原生野鳥ネイチャーセンター	13	44	22.8%
⑤北方館・望郷の家	29	143	16.9%

【解析による分類】

- 事故経験『あり』の割合をもとに、k-means法で2群に分ける分析をし、5施設を分類した結果、2つのグループに自然に分かれた（シルエット係数0.84）。
- 施設の特徴から、それぞれ『地元利用型』と『観光・学習型』に分類した。

分類結果

分類	施設
高経験率群（中心51.97%）＝地元利用型	①、②
低経験率群（中心22.51%）＝観光・学習型	③、④、⑤

分類別による事故経験の有無と「あり」割合

調査箇所	事故経験		
	あり	なし	「あり」割合
地元利用型 ①+②	327	302	52.0%
観光・学習型 ③+④+⑤	161	495	24.5%

- 地元利用型と観光・学習型の施設を比較すると、観光・学習型の来訪者に比べると地元利用型の来訪者や約2.1倍の事故リスクがある結果となった。
（ χ^2 検定： $\chi^2=102.68$ 、 $p<0.001$ ）

2. 調査方法

【調査箇所・対象】

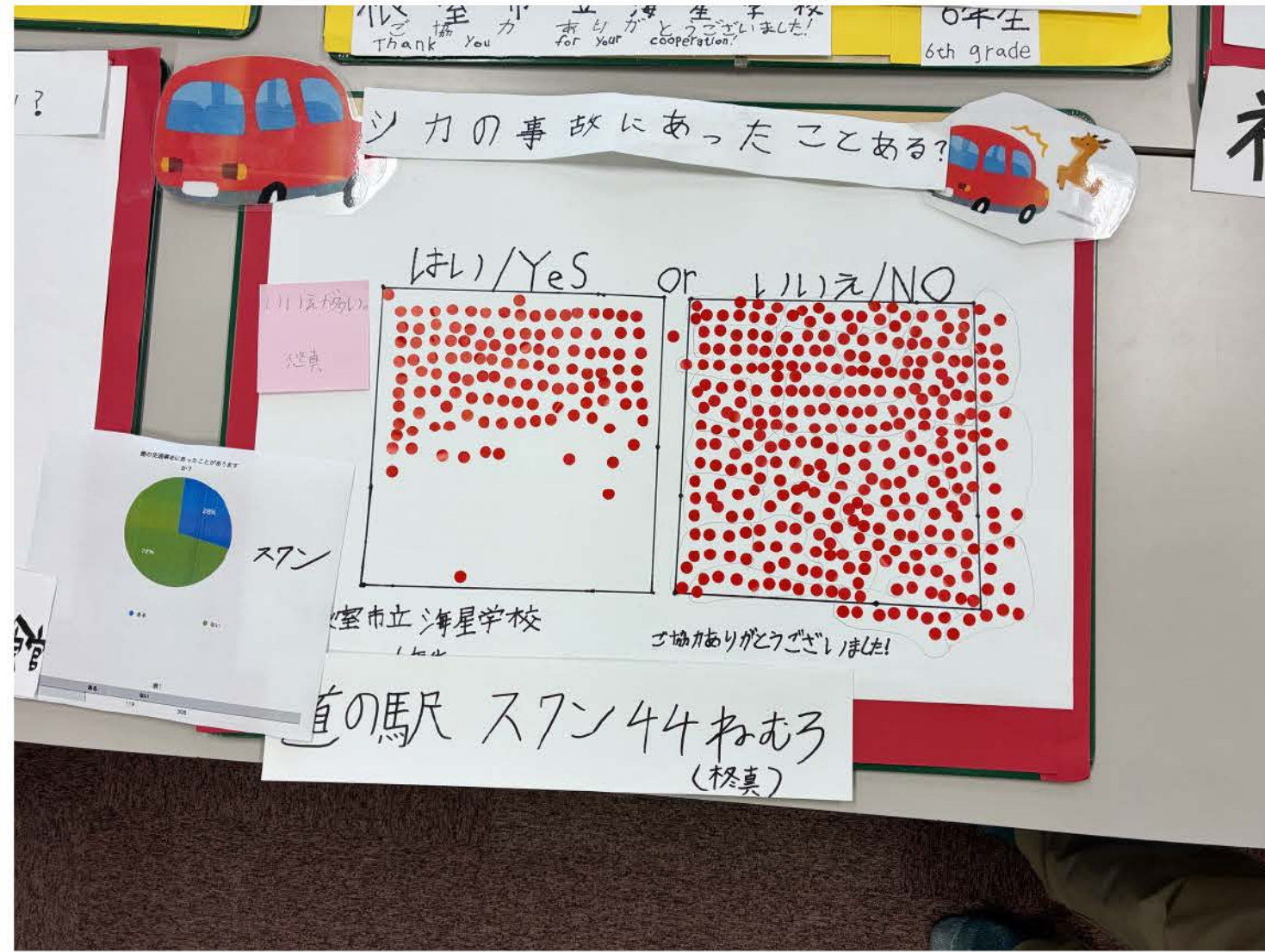
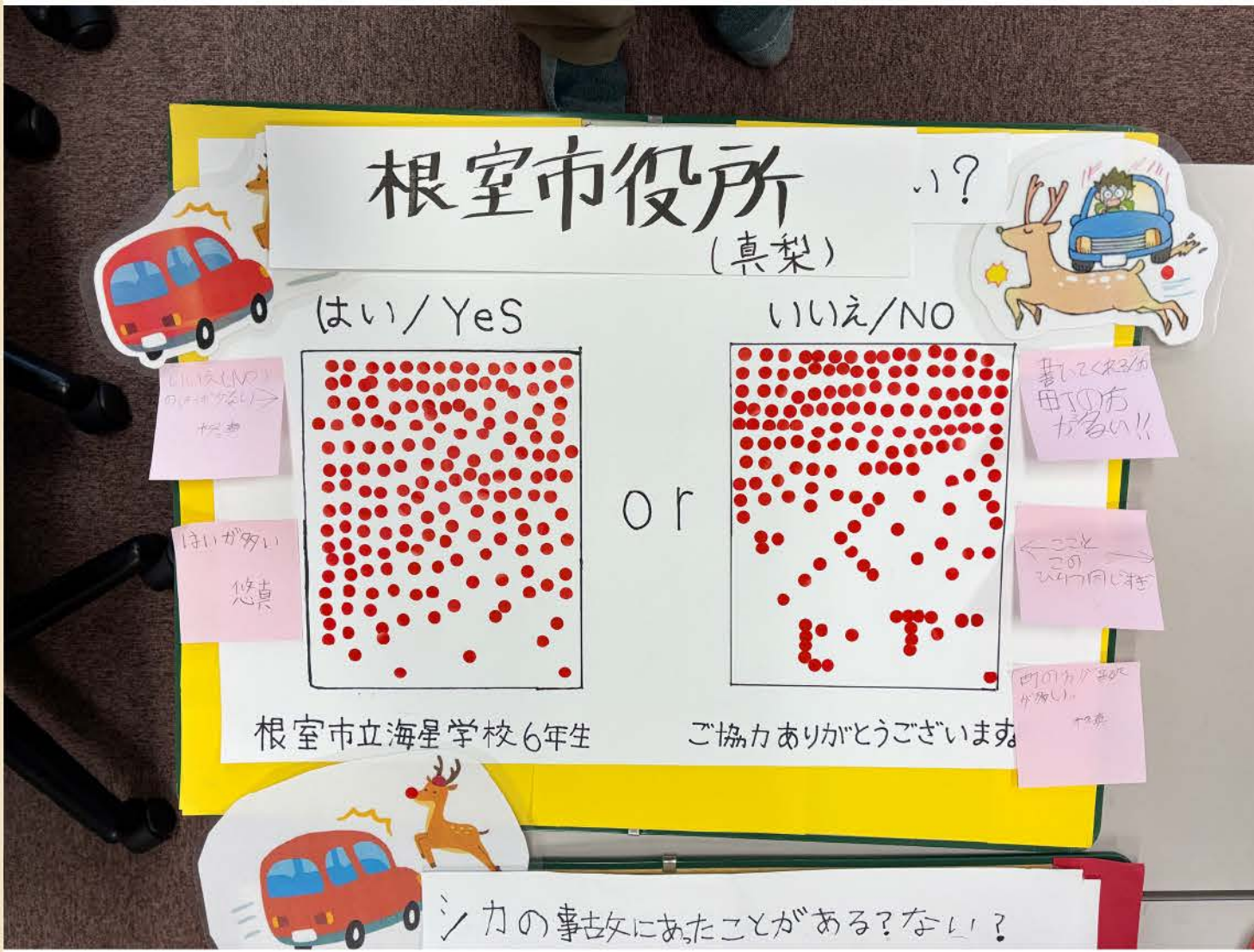
- 調査は、市内の5施設で実施し、来訪者を対象とした。
 - ①根室市役所
 - ②根室市総合文化会館
 - ③道の駅スワン44ねむろ
 - ④春国岱原生野鳥ネイチャーセンター
 - ⑤北方館・望郷の家

【調査方法】

- 2025年6月4日～6月27日（24日間）において、各施設にフリップボードを設置し、事故経験の有無についてシールを貼ってもらった。

【解析方法】

- 事故経験「あり」の割合を指標として、統計解析を行い結果をまとめた。



フリップボードの調査結果例

4. 考察

- 根室市の居住者は、エゾシカとの衝突リスクのある市内を車で走行することが多く、さらにシカの行動が活発になる薄明薄暮時と通通勤時間帯が重なることで、事故経験ありの割合が高くなったと考えられる。
- 観光客は、滞在時間が短いため、観光・学習型では事故経験ありが少なかったと考えられる。
- 運転行動から推察すると、地元ドライバーは“いつもの道”であるため、慣れによる注意力散漫の可能性がある一方で、観光客は“初めての道”であるため、低速で慎重な運転をしている可能性がある。

5. まとめ

- 本ポスターは、根室市立海星学校6年生による調査をもとにまとめたが、野生動物との事故要因を推定するための基礎調査として有効であったと考えられる。
- 地域課題となっている野生動物との交通事故は、学習テーマとして、とても良く、地域学習として取り組む意義があると考えられる。
- 地域の教育機関や観光事業者と連携した情報発信等の取り組みを行うことにより、事故抑制の可能性が高まると考えている。



2024年4月 根室市東和田で確認したエゾシカの群れ